新春　インタビュー

県出身の著名人二人に聞く

ライフネット生命（東京）の会長であり、オピニオンリーダーとしても活躍する出口治明氏。携帯電話のａｕの「三太郎シリーズ」や家庭教師トライなど斬新でユニークなＣＭを手がける篠原誠氏。この２人は津市美杉町出身である。

今回は活躍する県出身の２人に仕事やふるさとについて話を聞いた。

クリエイティブ・ディレクター／ＣＭプランナー　篠原　誠氏

三重での原体験がＣＭ制作に影響

▼篠原さんは三太郎シリーズなど数々のお茶の間でおなじみのＣＭを手掛けていらっしゃいますが、具体的にどのようなことを行っていますか。

広告制作はアートディレクター（以下ＡＤ）とコピーライターで行われます。ＡＤは言葉のとおりビジュアルを考える人で、コピーライターは言葉を考える人です。日本ではそれに加えＣＭを企画し提案するＣＭプランナーという職種もあります。他にも今はいろいろな職種が増えていますが、私は、コピーライター兼ＣＭプランナーをやっており、４年ほど前にクリエイティブ・ディレクター（以下ＣＤ）になりました。野球で例えると、ＡＤやコピーライターがピッチャーやキャッチャーだとすると、それらを束ねて「こっちの方向に行くぞ」とディレクションを入れるのがＣＤで、監督に当たる役割でしょうか。三太郎シリーズでは私は、ＣＤでありＣＭプランナーであり、コピーライターとしても関わっています。また桐谷健太さん扮する浦島太郎が歌う「海の声」の作詞も担当させていただきました。

▼三太郎シリーズを企画したきっかけを教えてください。

ａｕのブランドスローガンは、「あたらしい自由。」。それは、既成概念を壊してどんどん新しいものを提案するという考え方です。そこでまずみんなが知っている共通で分かっているもの（既成概念）はと考え、昔話が思い付きました。ではこれを壊したり再構築したり、ずらしたりすることで、「あたらしい自由。」というブランドスローガンを表現できるのではないかとなりました。桃太郎、金太郎、浦島太郎が実は友達だったという設定もその再構築のひとつです。キャラクター設定も桃太郎といえば正義感で清廉潔白な感じだけれども、少しやんちゃにして、そうしたらキャスティングは松田翔太さんがいいんじゃないかとか。本来、金太郎も力持ちで頼もしい感じだけれども、それを少しずらして、いじけやすくて調子乗りみたいな（笑）ことを考えると既成概念を壊すことを表現でき、「あたらしい自由。」を感じてもらえるのではないかと考えました。

ｉＰｈｏｎｅがどこの携帯会社でも使えるようになった瞬間に、本当は差があるのに、世の中の人が料金も通話品質もどこもだいたい同じだと思ったと思うんです。そういったなか大事になってくるのが「何となく好き」というところなんです。僕らの世代では、ちょっとした機能が付いている、付いていないだったら付いている方がいいや、価格をちゃんと比較して少しでも差があったら安い方に、という世代なのですが、今の10代や20代の人たちは、好きだから選んでいるというのが強くて、「何となく好き」というのが判断基準になり得るんです。そうなったときに、「何となく好き」というところを捉えた方がいいのではないかと思って、ブランド広告に近い三太郎シリーズが生まれました。

篠原さんが携わる三太郎シリーズの新年ポスター

▼なぜ今の仕事を選ばれたのですか。

私は美杉村（現・津市美杉町）の川上出身なのですが、そのころ自分の中で気にしていた言葉は、「井の中の蛙（かわず）」。せっかく１回の人生だから井の中の蛙でいないようにしたいとだけは思っていて、まず東京に行きたいと思い、東京にある大学に進学を決めました。

大学でマーケティングに出会って、それが僕にとってはすごく面白かった。ものを売るということは、僕はすごいことだと思っています。世の中のどの商品、どのサービスも基本的にはそれ自体がクリエーティブなもので発明品だと思っていて、そのサービスや商品を自分のアイデアによってもっと売ることができるというのは、すごく素晴らしいことだと思っています。ものが売れると、つくった人、売った人はもちろんお金が入って喜ぶけれども、買った人ももしかしたら、それを使って幸せな気持ちになる可能性がある。つまり、みんなが幸せになる可能性があるんです。それを自分のアイデアによってさらに加速させることができるというのは、すごく面白いなと思い、今の仕事を選びました。

自分が担当させてもらう商品やサービスがいかに商いとして繁栄するかどうか、営業みたいなことを言いますが、それが一番僕の中でブルブルッとくるくらいにうれしいことです。自分がつくった広告でものが売れたり評判が上がったり、何かしらプラスの要素が出るとすごく楽しいので、そのことをいつも気にしてはいますね。

▼仕事をする上でどのようなことを心掛けていますか。

新入社員で会社に入ったとき、僕はクリエーティブ志望ではなくてマーケティングを生かした営業志望だったのが、クリエーティブ配属になった。だから、何も分からない門外漢のところに行ったんです。最初は、誰がやっても同じような単純作業も多く、間違うとふてくされるようなことが続いていたときに、私の師匠が「どんな仕事でも意味はある、もし意味がなかったら自分でつくればいいんだ」と。今やっているこの仕事は、仕事の行程を覚えるためにやっているんだと、自分で決めて意味をもたせれば無駄には思えないと考えるようになったんですね。つまり単なる石切り場から石を運ぶという作業は単純労働かもしれないですが、この運んだ石が橋をつくってみんなのためになると思うと、少し気分が変わりますよね。仕事のゴール地点、目的、行き所を自分が決めればいいだけだという話が、すごく僕にとっては大きくて。それ以来どんな仕事でも、これはこういうためにやるんだとか、こういうためになるんだと思って取り組むようにしています。たとえどんな仕事でも投げやりにならず一生懸命に取り組むようになり、それを評価してくれる人がいる。そうすると新しい仕事が来て、やりたい仕事に近づけるという好循環が生まれると思うんです。

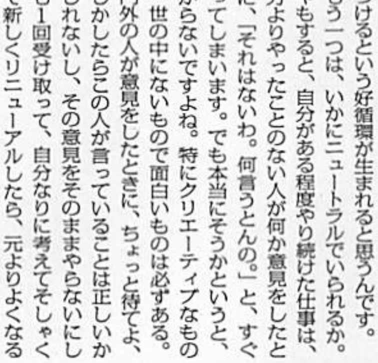
仕事の取り組み方などについて話す篠原さん

もう一つは、いかにニュートラルでいられるか。ややもすると、自分がある程度やり続けた仕事は、自分よりやったことのない人が何か意見をしたときに、「それはないわ。何言うとんの。」と、すぐ思ってしまいます。でも本当にそうかというと、分からないですよね。特にクリエーティブなものは、世の中にないもので面白いものは必ずある。専門外の人が意見をしたときに、ちょっと待てよ、もしかしたらこの人が言っていることは正しいかもしれないし、その意見をそのままやらないにしても１回受け取って、自分なりに考えてそしゃくして新しくリニューアルしたら、元よりよくなるのではないかと考える。そうすると実際よくなることがあるんですね。そういうのを経験して、どれだけいろいろなものに対してニュートラルでいられるかをすごく大事にしています。

▼三重県での思い出を教えてください。

私の住んでいたところは、田舎で本当に山と川しかないところでした。三人兄弟だったのですが、兄たちと父親の晩酌用に魚釣りを毎日していましたね。小学校は同級生が男３人、女３人で少なかったですが、雪が降ったらみんなで雪合戦をしたり、勉強した思い出よりも自然と寄り添って遊んだ思い出しかありません。

高校は津高校だったのですが、自宅からの通学が大変なので下宿をしていました。同じ下宿の三重大学の人にビリヤードなど遊びに連れて行ってもらったりして、美杉では経験できなかったことができて刺激的でした。またボート部だったので、岩田川で練習をしていて、津の海が印象に残っています。同級生など友達にも恵まれ津での嫌な思い出は一つもなく今思うと住みやすい場所だったんだと思っています。


母校の津高校で講演をする篠原さん

▼三太郎シリーズでは、美杉や津市のイメージや影響があるのではないですか。

あると思います。三人兄弟だし、小学校は同級生が男３人で、三太郎の会話劇でも台本は書きやすいですね。また桐谷さんが歌う「海の声」の詞も、高校時代の津の海だったり、少し前にやっていた、桃太郎、金太郎、浦島太郎の子どものころを描いたもので神社の風景があるのですが、自宅の近くに川上山若宮八幡宮がありましたし、何となく自分の原体験が影響していると思います。

▼三重には帰省されることはあるのですか。

年に１回は必ず帰っています。帰ってじいちゃん、ばあちゃんの墓参りをしないとなんだか気持ちが悪いんですよね。あと実家に帰ると、文章でいう「。」がつけられるというか。落ち着くんです。

昨年の10月には、津高校の同窓会の依頼で全校生徒と同窓生に講演をする機会をいただきました。生徒らにこれまでの職歴を振り返りながら、華やかな部分だけでなく壁にぶつかってきたときに心に留まったことや心掛けていることをお話させていただきました。

一番の土台になっているのは自分が育ってきた津や美杉や川上です。自分にとってすごく大好きなふるさとです。三重県にとってプラスになることは依頼があれば何でもやりたいと思います。

【プロフィール】

篠原誠　電通第３ＣＲプランニング局　クリエイティブ・ディレクター／ＣＭプランナー　津市（旧美杉村）出身。１９９５年に電通入社。クリエイティブに配属。ショートフィルムの脚本や楽曲の作詞までてがける。最近の仕事に、ａｕ三太郎シリーズや家庭教師トライなどがある。２０１５年クリエイター・オブ・ザ・イヤー受賞。

謹賀新年